

「聖書が説く『幸いな人』」

マルコによる福音書 5:1-20

主任牧師：重田 稔仁

<メッセージ>

序論

みなさんは、自分のこと「幸せな人！」だと思えますか。
子供の頃は幸せだったとか、中学時代は幸せだったとか、二十歳の頃は、三十代は、今が人生で初めて幸せ！ちなみに生まれてからこの方ずっと自分は幸せだった！と公言できる人っているでしょうか。もしおられたとしたら、その方はよほど幸運か、前向きな人か、あるいはおめでたい人かのどちらかだと思います。

聖書はこの世で成功を修め、人々から賞賛され、尊敬され、病気せずに順風満帆に暮らしている人を“幸いな人”だと教えていません。ましてや神を信じてそんな人生を送れるとは約束していません。

聖書が教える”神を敬い、神を慕い求める人”に約束している幸とは！

それは、“神さまがこの私をどれほど深く愛しておられるかを知ること”だと教えています。

本当でしょうか…！

今朝は聖書が説く“幸い”について、一緒に学んでみたいと思います！

マルコの福音書 5:1~20

「一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが舟から上がられるとすぐに、汚れた霊に取りつかれた人が墓場からやって来た。この人は墓場を住まいとしており、もはやだれも、鎖を用いてさえつなぎとめておくことはできなかった。これまでも度々足枷や鎖で縛られたが、鎖は引きちぎり足枷は砕いてしまい、だれも彼を縛っておくことはできなかったのである。彼は昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた。イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、大声で叫んだ。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」イエスが、「汚れた霊、この人から出て行け」と言われたからである。そこで、イエスが、「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。汚れた霊どもはイエスに、「豚の中に送り込み、乗り移らせ

てくれ」と願った。イエスがお許しになったので、汚れた霊どもは出て、豚の中に入った。すると、二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだ。豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。人々は何が起こったのかと見に来た。彼らはイエスのところに来ると、レギオンに取りつかれていた人が服を着、正気になって座っているのを見て、恐ろしくなった。成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれた人の身に起こったことと豚のことを人々に語った。そこで、人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いだした。イエスが舟に乗られると、悪霊に取りつかれていた人が、一緒に行きたいと願った。イエスはそれを許さないで、こう言われた。「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにくださったことをことごとく知らせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとくデカポリス地方に言い広め始めた。人々は皆驚いた。」マルコによる福音書 5:1-20

導入

マルコ5：1に「一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。」とありますが当時、ゲラサはガリラヤ湖の東岸にある異邦人が多く住む地だった言われています。

そう言われている理由は、ユダヤ人にとって汚れた動物とされている豚(レビ記 11:7)がその地で大量に飼育されていたからです。

「ところで、その辺りの山で豚の大群がえさをあさっていた。」

マルコによる福音書 5:11 新共同訳

ところで、ヘブル語でゲラサ人をゲーラーシイームと言いますが、これは「追い出す、投げ出す」という意味の動詞ガーラシュがその語源だと言われます。そこから、「ゲラサ人」という名称は、〇〇から追い出された人、すなわち樂園から追放された人と意識できます。そのゲラサ人は悪霊に取り憑かれていたと福音記者マルコは紹介されています。彼は人里離れた墓場に住み、鉄の足枷でも縛り付けておくことができず、昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていたと。

傍観者としてこの男を見ると気の毒としか言いようがありませんが、周囲の人々にとって彼が恐れを抱く存在だったことは容易に察しがつきます。

ですから彼の近親者を含め隣人たちは何とかして彼を鎖で繋ぎ止めたかったのでしょう。しかし彼は鎖を引きちぎり、“昼も夜も墓場や山で叫んだり、石で自分を打ちたたいたりしていた”のです。

その悪霊に取り憑かれた男がイエス様と出会ったのです。その出会いの場面を福音記者マルコはこう記しています。

マルコ5：6～7「イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、大声で叫んだ。「いと

高き神の子イエス、かまわないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい。」

するとイエス様は男にというか男に取り憑いている悪霊にこうおっしゃいました。

マルコ5：8～9　そこで、イエスが「名は何というのか」とお尋ねになると、「名はレギオン。大勢だから」と言った。そして、自分たちをこの地方から追い出さないようにと、イエスにしきりに願った。

悪霊は自らの名をレギオンと告白しました。これはローマの軍団を意味する単語ですからおそらく男には複数の霊が取り憑いていたのでしょう。

そんな悪霊たちはイエス様にゲラサから追い出さないように自分たちを「豚の中に乗り移らせてくれ」と哀願しました。

そこでイエス様が彼らの願いをお許しになると汚れた霊たちは男から出て、豚の中に乗り移り、乗り移られた二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖になだれ込み、湖の中で次々とおぼれ死んだと5：12～14にあります。

湖で溺れた豚を思うと気の毒ですが、この出来事に一番ショックを受けたのは当然のことですが豚の飼い主です。

彼は事件後、直ちに町や村に出かけて行って事の顛末を人々に語りました。その話を聞いた人々は豚飼いの話の真偽を確かめるために事件現場にやってきて、彼の話が本当だったことを知りました。なぜならそこに彼らを悩ませていたあの悪霊に取り憑かれた男が正気になって座っているのを見たからです。

その結果、人々は、イエス様にこの地を立ち去ってくれるように懇願しました。

これは意外な展開です。

普通であれば、悪霊に取り憑かれた男を救い出した奇跡の人イエス様を歓迎してしかるべきなのに、彼らはイエス様に立ち去っていただきたいと懇願したのです。

そんな人々の願い通り、イエス様は船に乗りその地を立ち去ろうとなさったのですが、ここで悪霊に取り憑かれていた男がイエス様に同行したいと申し出たのです。しかしイエス様は男の願いを退けて彼に自分の家に帰りなさいと命じました。

5：19　「自分の家に帰りなさい。そして身内の人に、主があなたを憐れみ、あなたにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」

男はイエス様の言いつけ通り、自分の身内だけでなくデカポリス地方（パレスチナの10の植民地の総称）を行きめぐり、イエス様が自分にしてくださった大きなみわざについて語り歩いたのです。

この男のような人を聖書は「幸な人」と呼ぶのです！それは神の憐れみ、慈しみを、身をもって体験しそれを述べ伝えることを生きがいとしている人を指します。

みなさん、私たちは幸な人です。

なぜなら私たちは皆、イエス様と出会って、神の憐れみ、慈しみを身をもって体験しているからです。しかし、誤解がないように申し上げておきますが、神様の憐れみ、慈しみを体験し実感するために悪霊を追い出していただくようなドラマチックな経験は必要ありません。なぜならイエス様と出会うなら人は誰でもこの男が味わった神の慈しみを知る喜び、幸を味わうことができます。そしてその喜びは持続します！

皆さん、幸せですか？

クリスチャンライフに喜びがありますか。

多くのクリスチャンと話をすると、自分は幸薄いと感じている方が少なくないんですよ。特にクリスチャンライフが長い人にその傾向が強い。

何故、イエス様に出会ったとき感じたあの喜び、感動は長続きしないのでしょうか。

それは、私たちとイエス様の関係が希薄だからです。あるいはその関係が形骸化しているからです。もしイエス様と私たちの関係が生きた関係ならいつでも、どんな時も、いつまでもクリスチャンライフに喜びが尽きることはありません。

では、イエス様との生きた関係ってどんな関係でしょうか。

その内実はマルコの福音者4章に登場する悪霊の支配から解放された男とイエス様の関係から読み解くことができます。

男にとってイエス様とは？どのような存在だったのか。

男はどのような状態でイエス様と出会ったのでしょうか。彼は悪霊に取り憑かれてその人格を乗っ取られ、人間の尊厳を見失い人々から忌み嫌われ独り墓場に住んでいました。

すなわち周囲の全ての人々が彼に敵対し、彼も周囲に敵対する状況にありました。そんな男と出会ったイエス様は男を憐れみ、彼を悪霊の支配から解放したのですが。

これは何を意味しているのか。

イエス様は家族から、共同体から、社会から追放され、孤独感と敵意の中にいた男の味方となるために、彼を悪霊の支配から解放したのです！それは、彼の友となり、味方になるためでした。このイエス様の憐れみ、慈しみを知った男だからこそイエス様は彼の同行したいという願いを退け、むしろ彼に神の国の福音を託したのです！

男に託された福音、それは世界中の全てがあなたの敵となっても、この社会から、仲間から、身内からあなたが追い出されても神があなたの味方となり、あなたの友となってくさる！という福音です。

これがイエス・キリストの福音です！

イエス様は、悪魔の試みに合われたとき

3年半後、ご自身が同胞のユダヤ人の手で十字架に磔りつけにされ殺されることをご存じでした。イエス様は、人々がイエス様をイスラエルの救世主として熱狂的に迎えたとき、同じ人々が自分を十字架に磔つけにせよ！と絶叫することを知っていました。

そして、予見通りご自身が十字架に磔つけにされたとき、イエス様はどうなさったか、イエス様は罪人の友として、死に赴いたのです。それはイエス様が罪人の味方であることを証しするために。

イエス様は私たちがどのような者であっても私たちを見捨てて逃げません。イエス様は、私たちの真の友であり、味方だから。

イエス様を信頼する人、
それが聖書が説く幸いな人です！